

「ウソとホント」

2015年09月26日

「東京新聞」の25日の「筆洗」に興味深いことが書かれていた。脳神経外科医のオリバー・サックス氏が失語症を患った人たちに、元俳優で、巧みな話術で知られる米大統領の感動的な演説を聞かせたところ、皆大笑いしたという。彼らは言葉の意味そのものは理解できないが、声の調子や表情に敏感になる。心のこもった話なら驚くほど理解するが、不実はやすやすと見抜く。言葉の意味が分からないから、言葉では騙されない。大統領の芝居じみた態度は悪い冗談に見えたのである。この大統領はロナルド・レーガンであろう。

サックス氏は、失語症とは逆に、論理な言葉は理解できるが、声に込められた喜怒哀楽をつかめない音感失認症の女性に大統領の演説を聞かせた。感情に訴える表現を受け付けなくなった彼女は「説得力がないわね … なにか隠しごとがあるんだわ」と評したという。私は、レーガン大統領が辞任した時、妻のナンシー・レーガンは「立派に演じ切りました」と賛辞したと聞いたことがある。政治は演技なのであろうか。

サックス氏の報告を思いながら、「筆洗」の筆者は安倍首相の再選会見を見たという。身振りをまじえ、声に抑揚をつけ「この三年日本を覆っていたあの暗い空気は一掃することができました。日本はようやく、新しい朝を迎えることができました」と笑顔で語る演説であった。サックス氏の患者たちが安倍首相の会見を見聞きしたら、どんな反応を見せたのだろうかと結んでいる。

私は牧師として、多くの死に逝く人々と出会い、お別れをしてきた。その経験から、臨終にある人はウソとホントを見極めているのではないかと思う。彼らは決してウソをつかない。弱さと不安を真っ直ぐに訴えるが、それを乗り越えようとする気丈な思いを語る。向かい合っている私のウソとホントが試されているようであった。彼らを見舞う時は、真実を語らせてくださいと祈る。死を突き抜けた永遠に対する信仰を自らに確かめ、安価な励ましを語らないように心掛ける。

こんな経験がある。大男で顔が大きく髭も生やしていた。彼はどう見ても怖い男に見える。ところが、彼と一緒に老人ホームに行くと、皆、彼に親しく呼びかける。そして、彼が臨終のベッドにある人に顔を向けると、髭面の顔をなで回して喜ぶ。弱くなった人々は、彼の優しさを見抜くのである。障がいを負った人々も、人の放つオーラからウソとホントを見抜く。彼らは人間の本質を捉え、強弱を超えて、生きていると思わされる。障がい者こそが人間の本質を現している。サックス氏の報告は事実を伝えていると思う。

政治家たちは強く、豊かであることを誇示し、宣伝したが。米国はアフガニスタン攻撃の時、アフガニスタン大統領を恫喝して、協力させたと言われている。安倍首相も、一流国家から二流国家に落ちていいのかと脅され、安保法案を成立させたのではないか。力を誇示するところにはウソが漫延している。人間を見ていないし、見ようともしていない。自らの弱さを認識し、ウソを見抜く、人間本来の心を取り戻す時ではないか。

ヨーロッパの大寺院は、荘厳で世界を睥睨しているかのようにキリスト教の力を誇示している。しかし、福音書が告げる主イエスは、権力ある者たちに排斥され、弟子たちからも裏切られ、弱さの極みで十字架刑に処せられた。聖書は、主イエスの、この弱さに人間の救いがあると告げている。弱さからウソとホントを見抜き、弱さから人を生かすホントを確立したのである。弱さを絆に結び合い、偽りの強さを葬り去る夢を見、実現したいものである。